



ISSN 0385-0838

第 115 号

発行所

亜細亜大学アジア研究所
東京都武蔵野市境5-24-10

電話 0422 (54) 3111

郵便番号 180-8629

変えることの

できるものと、できないもの

梶村 昇

志賀直哉のフランス語・国語論

戦後間もなく志賀直哉（一八八三～一九七二）が、日本はフランス語を国語にしてはどうかと提唱したと聞いて哑然としたことがある。それから何十年かたった昨今、高島俊男氏の『漢字と日本人』（文春新書・平成十三）という本の中で、その文章にめぐりあったので、改めて一言言いたい気になった。

まず高島氏の本に引用されている志賀直哉の文章をみてみよう。昭和二十一年（一九四六）四月の『改造』誌上である。

私は六十年前、森有礼が英語を国語に採用しようとした事を此戦争中、度々想起した。

若しそれが実現してゐたら、どうであつたらうと考へた。日本の文化が今よりも遙かに進んでゐたであらう事は想像できる。そして、恐らく今度のやうな戦争は起つてゐなかつたらうと思つた。吾々の学業も、もつと楽に進んでゐたらうし、学校生活も楽しいものに憶ひ返す事が出来たらうと、そんな事まで思つた。

そこで私は此際、日本は思ひ切つて世界中で一番いい言語、一番美しい言語をとつて、そのまま国語に採用してはどうかと考へてゐる。それにはフランス語が最もいいのではないかと思ふ。六十年前に森有礼が考へた事を今こそ実現してはどんなものであらう。不徹

目次

- 変えることのできるものと、
できないもの …… 梶村 昇 …… (1)
- 第二期アロヨ政権の課題
…… 野沢 勝美 …… (4)
- インドの国民議会選と南アジアの
動向 …… ペマ・ギャルポ …… (6)
- 「国際中堅企業」の登場(Ⅱ)
…… 西澤 正樹 …… (8)
- 中国と北朝鮮との国境貿易実態(Ⅰ)
…… 李 虎男 …… (10)
- 『アジアの窓』中国の大学生も就職難
…… 小林 照直 …… (12)

底な改革よりもこれは間違ひのない事である。森有礼の時代には実現は困難であつたらうが、今ならば、実現できない事ではない（一九四く五ページ）。

古い話を持ち出して非難されては、志賀直哉も迷惑だと思われるかも知れないが、この時、彼は六十三歳である。名作『暗夜行路』は、大正十年（一九二一）から昭和十二年（一九三七）まで、この『改造』誌上に連載されたもので、すでに「小説の神様」といわれていた頃である。若気の至りで書いたとはいえない年齢である。

森有礼の英語・国語論

ついでにこの文章の中に二度も出てきた森有礼（一八四七～八九）の意見も知りたいところなので、重ねて高島氏の本から、こんどは地の文もまとめて引用させてもらおう。

英語採用論を主張した人は数多いが、その最も著名なのは、文部大臣であつた森有礼である。

森の考えは、アメリカで刊行した英文著書『日本の教育』（Education in Japan, 1873）、特にそのなかの、米国の学者ホイットニーにあてた手紙に見えている。そこで森は、「わが国の最も教育のある人々および最も深く思索する人々は、音標文字 phonetic alphabet に対するあこがれを持ち、ヨーロッパ語のどれかを将来の日本語として採用するのでなければ世界の先進国と足並をそろえて進んでゆくことは不可能だと考えている」とのべている。もって当時の日本の知識界の雰囲気を知るに足る。

これに対してホイットニーは、言語はその種族の魂と直接に結びついたものであるから、そう安易に放棄するなどと言ってはならない、と森に忠告した（一七〇～一ページ）。というのである。この続きをもう七、八行引用させてもらおうと、

森はまた言語だけではなく人種も変えるべきであるとなえ、日本の優秀な青年たちは、アメリカへ行つて、アメリカ女性と結婚してつれて帰り、体質・頭脳ともに優秀な後

代を生ませよ、とすすめた。

意見としてはばかばかしい、あるいはたわいないものだが、これも当時の日本の一般的な気分を知るにはよい材料である。

言われるとおり、まったくばかばかしい、たわいない話だが、志賀直哉も森有礼も真剣に言っているようなので、これは一体どうしたのかと思わざるを得ない。本当のところ、志賀直哉については、高弟の阿川弘之氏にご意見を伺つてみたいところである。

思うにこれは失礼だが、明治といい、戦後といい、世の中が百八十度転換してしまったので、気が顛倒して、自分を見失い、観念に振り回されてしまったのではないかという気がする。

こうした衝撃はなかなか収まらないものともいえて、昭和四十三年（一九六八）になって、この年が明治百年に当たるというので、各地で記念行事が企画された。その時、こんな意見がマスコミを賑わせた。

日本は敗戦によって新しい国に生まれ変わったのだから、明治から数えるようなことは、すべきではないというのである。

この論法でいくと、戦前・戦中・戦後と生きてきた私など、戦中以前の事はなかったと思えということになる。そのようなことができるわけがない。善かれ、悪しかれ、その時代が私を育んできたのであるから、それを離れた私などあるはずがない。

しかしそれから三十数年たって、平成十六年

（二〇〇四）になると、この年が日露戦争開戦百年になるというので、こんどはマスコミが率先して回顧談などを披露し始めた。しかし明治切り捨て論など、少しも影を見せなかった。時代に落ち着きが出て、長い目で物がみられるようになったということであらう。

それでも国会などでは、相変わらず観念論が横行し、愚にもつかないことを延々と論じている。教育基本法とか、夫婦別姓論などがそうである。

ニーバーの祈り

こういう時、いつも思い出す言葉がある。ニューヨークのユニオン神学校の教授であったラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr 1892～1971）の有名な祈りの言葉である。

神よ、

変えるべきものについては、

それを変える勇気をわれらに与えたまえ。

変えることのできないものについては、

それを受け容れる冷静さを与えたまえ。

そして変えるべきものと、

変えることのできないものとを

識別する智慧を与えたまえ。

というのである。これはいつでも、どこでも望まれることである。

そこで「変えることのできないもの」として「民族の三つ子の魂」ということを考えてみたい。聞きなれない言葉であらうが、これは一言

でいえば、民族にはそれぞれ三つ子の魂があり、いつまでも消滅することなく、民族の底流となつて、異文化などを変容していくというものである（拙著『日本人の信仰』中公新書・昭和六三）。

民族の三つ子の魂とは、それ無くしては民族が成り立たないというものである。具体的には、生活の場と死後とを司る〈言葉〉と〈魂〉の行方に対する信仰とである。

言葉が無くては生活は成り立たない。森有礼にホイットニーが、言語はその種の魂と直接に結びついたものであると忠告したというのは尤もなことである。民族が自分の言葉を失った時、生物学上の種族は存在しても、民族としては滅亡したと言わざるを得ない。今の満州族に民族の残光を見る思いがして哀愁を感じる。

言語とはそういうもので、変えることのできないものである。それを軽々しく、英語に変えよう、フランス語にしようなどと言うのは空論も甚だしい。

魂の行方

生活の場における言葉に対し、死後に魂がどこへ行くかということは、民族の根源に関わることである。それは過去・現在・未来と民族をつなげる信仰であるからである。

日本人はその魂の行方をどう考えてきたか、これは容易な問題ではないが、柳田国男の『先祖の話』（筑摩書房）には、

日本人は昔から、家の先祖は亡くなると霊魂（タマ）となつて山に帰り、あの世とこの

世とを自由に交通しながら、先祖という一つの力強い霊体に溶け込んで、麓の子孫を見守ってくれると信じてきた（要約）。

とある。この通りであると思う。
これが日本人の三つ子の魂から生まれた根つこの宗教の根幹である。祖先と一つになつて生活していくという信仰である。これは民族として「変えることのできないもの」である。

よく（日本仏教は葬式仏教、祖先崇拜仏教で、釈尊の仏教とは違う）と非難される。これは江戸時代から言われ続けてきたことである。確かに日本仏教はもつと釈尊の教えを生かさなけれならぬ。その通りであるが、祖先崇拜仏教は、いくら非難されても変えることはできない。それは民族の三つ子によつて変容されたものだからである。

前述の通り、民族の三つ子の魂は、自分の体に合うように異文化を変容する。志賀直哉が賛美するフランス文化にしても、何も最初からそのような文化が存在していたわけではない。みんな異文化を自分流に変容したものである。

仏教も当然変容されて、祖先崇拜仏教になつた。どこの国に釈尊が説いたままの仏教が存在しているであろうか。インド、スリランカ、ミャンマー、タイ、中国、韓国、みんなそれぞれ自分流に変容した仏教である。

もし仏教がこの変容を拒否していたならば、おそらく日本に定着してはいなかったであろう。なぜならそれは異文化の交流を拒否したことになるからである。

キリスト教でも同じである。イエス・キリス

トの教えのままのキリスト教が、どこにあるというのであろうか。ヴァチカン、フランス、ドイツ、アメリカ、南米、東方正教会等々、みんな変容されたものばかりである。

ところがこの異文化交流の常態に背いている例がある。日本のキリスト教界である。キリスト教は、明治六年（一八七三）に禁制の高札が撤廃されてから今日まで百三十年余になるが、現在のキリスト教徒は、総人口の1%をわずかに上回るほどである。

なぜこれほど増えないかは、キリスト教会でも問題になつていようであるが、その原因の一つは、仏教が祖先崇拜仏教・葬式仏教になつているので、前車の轍を踏みたくないう思いから、斜に構えた宣教態度になつていることにあるようである。仏教のように変容されたくないというのである。外国で変容されてきたキリスト教は信奉し、日本での変容は拒否するというものであるから、おかしな話であるが、反省がだいぶ進んでいるようである。

仏教界もそうまで言われて、いつまでも根つこの宗教に安住してはならない。「変えることのできないものを受け容れる冷静さ」はそれとして、その上に培うものがなければ仏教の意味をなさない。

言いたいことは、民族の三つ子の魂によつて変容されたもの―それは変えることのできないものであるから、それを無視して、観念的、便宜的に事を運ぼうとしてはならないということである。天を仰いで唾する愚は避けて欲しい。

（かじむらのぼる・本学名誉教授）